

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

江東区立深川第五中学校 3年

守屋 真喜志

課題 ②

世界中で争いや分断が深まる今日、国連は必要だと思うか。

副題

「言葉」が通じる時代に深まる分断と、国連の存在意義

本文

② 「言葉」が通じる時代に深まる分断と、国連の存在意義

東京都の街を歩くと多様な言語が耳に飛び込み、近所のコンビニのレジに外国人が立つのも当たり前になった。先週末の土曜日のことだ、塾帰りのコンビニでレジ操作に困る新人の外国人店員に遭遇した。彼が示す翻訳アプリのおかげで言葉の壁を越えてスムーズに会話ができ、問題は一瞬で解決した。その時の僕は、最先端の技術を使えばどんな国の人とも簡単に心が通じ合えるのだと、誇らしいような高揚感を抱いていた。生成 AI は、人類が長年苦しんだ言語の障壁を身近な日常から完全に消し去ったかのように見える。

しかしニュースに目を向けると、世界の争いや分断はむしろ深まっている。この便利さと不条理な現実との矛盾の正体は何だろうか。国際的な紛争地域では、生成 AI による偽動画「ディープフェイク」がSNSで拡散され、人々の憎しみを煽っている。翻訳が容易なデジタル空間で、真偽不明の過激な情報戦が勃発しているのだ。

ある夜、ネットの過激な議論を見て「翻訳できるのに、なぜ世界は分かり合えないのか」と呟くと、仕事上の父親が言った。「言葉が通じることと、相手の背景や文化を『理解』することは全く別問題だ」と。

この言葉に衝撃を受けた。現在のデジタル社会は、AI のアルゴリズムが関心や都合の良い情報だけを画面に表示する。同じ意見の者同士がネットで繋がり、異なる考えを敵として排除する「エコーチェンバー現象」だ。匿名の空間で自分たちの正義だけが肥大化し、テクノロジーが進化しても、人々は見たい現実だけを見て他者への想像力を失いつつある。激しい言葉の応酬の末に、社会の分断は修復不可能なほどに深まっていく。僕はコンビニで翻訳アプリを使って「分かったつもり」になっていたが、その裏側で世界はデジタル上の虚像に引き裂かれているのだと気づいた。

この気づきから、僕は国連の必要性を全く新しい視点で見つめ直した。中三の公民で学んだときは「意思決定に時間がかかる効率の悪い組織」と批判的に捉えていた。しかし、一瞬で憎しみが拡散される現代だからこそ、国連の持つ「泥臭さ」が決定的な価値を持つのではないか。国連は、異なる歴史や文化、利害関係を持つ国々の代表が実際に集まり、顔を合わせて対話を行うリアルな場だ。都合の良い相手だけを選ぶことはできない。互いのエゴを剥き出しにして激しく対立し、罵り合

いながらも、同じ人間として膝を突き合わせて妥協点を探り続ける。この時間と手間がかかる「対面による意思決定のプロセス」こそが、情報戦によって引き裂かれかけた世界を繋ぎ止める唯一のブレーキであり、平和への泥臭い希望なのだ。

世界で分断が深まる今日、国連は必要かという問いに、僕は明確に「必要だ」と答える。国連がなければ、世界はネットの感情的な暴論に飲み込まれ、制御を失ってしまう。

僕はもうすぐ中学校を卒業し高校生になる。予測不能なデジタル社会を生き抜くために必要なのは、AIに思考を丸投げして「分かったつもり」になることではない。コンビニの店員さんの向こうにある、異なる国の文化や痛みを想像し、多面的な視点で世界を見抜く知性だ。

そのために僕はまず、スマホの画面を閉じ、地域の多文化共生イベントや学校の議論の場で、異なる意見を持つ人の言葉を「時間と手間」をかけて直接聴くことから始める。利便性に甘える子供ではなく、複雑な世界を複雑なまま理解しようと努力し、国連が目指す「対話による平和」を自分の街から実践できる大人への一歩を、今ここから踏み出したい。